

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：16301
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2014～2016
 課題番号：26463552
 研究課題名(和文) 幼児・学童期発達障害児と親を支援する先輩親からのメンタリング・プログラムの開発

 研究課題名(英文) Development of a mentoring program from an infant / school child developmental disabled child and senior parents to support parents

 研究代表者
 西嶋 真理子 (NISHIJIMA, Mariko)

 愛媛大学・医学系研究科・教授

 研究者番号：50403803
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：県内17の発達障害児の保護者団体に所属している親にペアレント・メンターへのニーズ調査を行ったところ、7割にメンターへの相談のニーズがあり、約半数にメンターになる意思があることを確認した。希望する発達障害児の親32名に対してグループ・トリプルPによるペアレント・トレーニングを実施し、修了者にペアレント・メンター養成講座を案内し、受講を募った。養成講座を修了した10名によるペアレント・メンターcafeを県内4か所で実施し、発達障害児の親の相談に応じた。以上の過程で関係機関との連携とメンタリングプログラムの基礎を築いた。

研究成果の概要(英文)：We conducted a survey on the needs of parents and mentors for parents belonging to guardian organizations of 17 children with developmental disabilities in the prefecture and confirmed that there was a need to consult with mentors in about 70%, about half of them are willing to become mentors. We conducted parental training with group-triple P for 32 parents of children with developmental disabilities, invited members to learn parent-mentor training courses, and attended lectures. Parent / mentor cafe by 10 members who completed the training course was conducted at four locations in the prefecture, and responded to consultation of parents of children with developmental disabilities. In the process above, we established a foundation for cooperation and mentoring programs with related organizations.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：発達障害児 親支援 ペアレント・メンター トリプルP

1. 研究開始当初の背景

発達障害に対しては教育の分野からは特別支援教育の一環で、保健医療の分野からは早期発見・早期支援・療育等の支援が行われ、市町村によっては、発達支援センター等、発達障害に特化した窓口が置かれ始めた。専門家の間では、全国で26万世帯、或は200万人と言われる「ひきこもり」やニートの30~40%に発達障害が含まれること、累犯障害者には知的障害者の存在がクローズアップされているが、実は少年院のところから発達障害者が多数収容されていることが報告されている。一方、発達障害があっても配慮ある養育環境や教育により、才能を發揮して、個人的・社会的に成功している人もおり、適切な支援により社会的な損失を減らすだけでなく、社会に大きく貢献することも期待できる。

子どもに育てにくい特性があると親の負担が大きくなり、虐待の対象となりやすい。発達障害児の多くの親は育てにくさを感じているが、早期に専門的な支援を得ることで、二次障害を予防し、良質な親子関係を築くことができる。知的障害を伴わない発達障害児は、全児童の6.5%を占めるものの、幼児期に発見することは難しい状況であった。そこで汎用性のある尺度として、M-CHATやPARSが幼児健診に用いられることで、早期の把握体制が整いつつある。しかし現実には思春期以降に現れた問題行動によって、初めて気づく場合も多い。また、幼児健診時に発見された場合でも療育機関等への紹介後やグレーゾーンの児に対する継続的な支援は、個々の保健師の判断に委ねられるところが大きく、自治体の体制も様々である。今後は、支援体制の構築、特に学校・地域・医療・福祉の連携が必要であり、これらの機関の専門家が子育ての困難感を敏感にキャッチし、専門的なサポートを受けながら、日常的な問題に対して、同じ問題を経験した先輩の親からの相談支援や学習を通じて、地域社会で解決する力を育む体制づくりが必要である。

2. 研究の目的

本研究は、発達障害児(2~12歳)の親に対する前向き子育てプログラム(トリプルP)9回コースすべてに参加した親が、メンターとなり、診断間もない幼児期から小学校低学年の発達障害児の親に対して、児の特性から生じる家庭や学校生活での様々な問題の予防及び対応力が身につくメンタリング・プログラムを新たに開発することが目的である。

3. 研究の方法

(1) 発達障害児の親に対する前向き子育てプログラム(ステップングストーンズ・トリプルP)計9回コースを県内3か所で実施し、プログラム前後で介入効果の比較及びフォローアップ講座を開催し、トリプルPを用い

たその後の経過についてグループ・インタビューを行った。

対象は3歳から12歳の発達障害児をもつ親で、JDDnet愛媛に所属する発達障害児の保護者団体に呼びかけ、トリプルPの概要を紹介するトリプルPセミナーを県内東部と南部の2会場で開催し、参加者を募った。応募のあった33名のうち応募条件に合致する32名を研究対象とした。

(2) A県内でJDDnet愛媛に加入する発達障害児親の会17団体に所属する親336名を対象に、ペアレント・メンターに関するニーズ調査を行った。

無記名自記式質問紙を親の会の代表者を通じて配布し、郵送法にて各会員から個別に回収した。内容は、基本属性、親の会において支援を受けた経験や他者を支援した経験、ペアレント・メンタリングの利用に関するニーズである。

親の会の入会年数を1年未満、1~4年、5年以上の3群に分けて2検定を行った。解析はSPSSを使用し、有意水準は $p<0.05$ としたが、 $p<0.1$ を傾向ありとした。 $p<0.1$ の項目については残差分析を行った。

(3) ニーズ調査の結果を踏まえ、ペアレント・メンター養成講座及びペアレント・メンターcafeを開催し、ペアレント・メンターの養成及びペアレント・メンター活動支援を行った。ペアレント・メンターの養成講座の後で、ペアレント・メンターを行うにあたっての心配事・強み・専門家に望む支援についてグループ・インタビューを行った。

(4) ペアレント・メンターシンポジウム等を企画・開催し、県内全域の関係機関や当事者にペアレント・メンターに関する理解を広め、支援体制構築のための学習会を実施した。

4. 研究成果

(1) ステッピングストーンズ・トリプルPの実施と評価

プログラム参加者について

プログラムに参加した親は父親が1名で残りはすべて母親だった。6回の集合セッションを3回以上出席し、電話セッションが実施できた27名を分析対象とした。

対象児について

平均年齢は7.7歳 \pm 2.4歳であった。男児22名、女児5名であった。情緒や行動の問題で専門家にかかっていたのは21名であった。発達の遅れ21名、知的障害6名、身体障害5名、視覚や聴覚の問題7名であった。

ステップングストーンズ・トリプルP計9回のセッションの介入前後の各種指標の比較

- 1) 親のふるまい
多弁さ、過剰反応で有意な改善が見られた。
- 2) 子どもの行動の難しさ
交友問題、行為問題、感情問題で有意な改善が見られた。
- 3) 親のストレス等
ストレス、不安、抑うつで有意な改善が見られた。
- 4) 子育ての気持ち
「すべきことが多くてきつい」「ストレスになる」「落ち込んだ気持ちになる」「助けが得られた」「パートナーとのしつけの一致度」に有意な改善が見られた。

フォローアップ講座の中でのグループインタビュー

3 回開催し、27 名中 11 名が参加した。また、ステップストーンズ・トリプル P に見学参加した保護者団体の役員 6 名もグループインタビューに参加した。トリプル P を受けてからの子どもや子育ての以下のような変化や母親の意識が語られた。

- 1) 医療機関や療育の先生などとてもお世話になりましたが、一番役に立ったのは、今回のトリプル P。同じ立場の人と知り合うことができたのもとても大きな収穫。
- 2) 環境が変わって不安定な状態になったが、トリプル P を思い出し、本を読み返しなが問題行動をチェックしていった。これが原因というのがわかり、すごく助けられた。今は先生がビックリされるくらい落ち着いている。
- 3) 行動日記やご褒美をあげてできることを増やしていくと聞いて、ご褒美をあげていいんだというのが目から鱗。褒美をあげると結構できて驚いた。
- 4) 褒めるって本当に大事なことなんだなって思った。褒めてみて息子の反応も良くなった。

(2)ペアレント・メンターに関するニーズ調査

質問紙の回収は 184 名(回収率 63.0%)、うち 182 名を分析対象とした。

他の会員からの支援で嬉しかったことがある者は、96.6%と回答者の大半を占めた。内訳で最も多い回答は「不安や困りごとに共感してくれた」であった。

他の会員に支援したことで嬉しかったことがある者は、入会年数 5 年以上で 8 割を占め他の群より有意に高かった。内訳で最も多い回答は「自分が人の役に立てて嬉しかった」であった。

メンターへの相談希望は全ての群で「あり」が 7 割を超えていた。メンターに相談する上で気がかりが「ある」はすべての群で 8 割以上に認められた。内容の内訳は「相手との関係構築の不安」「秘密が守られるか

心配」「支援内容がわからない」の順に多かった。

自身がメンターになる意思がある者は、全ての群において約半数であった。メンターとして活動する際の気がかりは、情報・知識不足、ノウハウ・経験不足の順に回答が多かった。

【親の会の会員間の支援の経験】

	親の入会年数				p 値
	計 (N=180) n(%)	0~1年 (N=52) n(%)	2~4年 (N=42) n(%)	5年以上 (N=86) n(%)	
他の会員から支援を受けて嬉しかったことがある	171 (96.6%)	48 (92.3%)	41 (97.6%)	82 (98.8%)	n.s.
自分が他の会員に支援して嬉しかったことがある	112 (63.6%)	18 (34.6%) -5.2	27 (65.9%) 0.3	67 (80.7%) 4.5	**

【ペアレントメンターへの相談】

	親の入会年数				p 値
	計 (N=180) n(%)	0~1年 (N=52) n(%)	2~4年 (N=42) n(%)	5年以上 (N=86) n(%)	
周囲にペアレントメンターがいれば相談したい	151 (83.9%)	48 (92.3%)	36 (85.7%)	67 (77.9%)	n.s.
ペアレントメンターに相談するうえで気がかりがある <内訳>	128 (71.1%)	37 (71.2%)	26 (61.9%)	65 (75.6%)	n.s.
秘密が守られるか心配	59 (43.1%)	17 (44.7%)	13 (48.1%)	29 (40.3%)	n.s.
相手との関係構築の不安	73 (53.3%)	21 (55.3%)	16 (59.3%)	36 (50.0%)	n.s.
支援内容がわからない	49 (35.8%)	8 (21.1%)	11 (40.7%)	30 (41.7%)	n.s.
相談に期待が持てない	16 (11.7%)	3 (7.9%)	2 (7.4%)	11 (15.3%)	n.s.
メンターに負担をかけさせる	15 (1.9%)	4 (10.5%)	3 (11.1%)	8 (11.1%)	n.s.
その他	9 (6.6%)	4 (10.5%)	2 (7.4%)	3 (4.2%)	n.s.

【ペアレントメンターとして活動すること】

	親の入会年数				p 値
	計 (N=180) n(%)	0~1年 (N=52) n(%)	2~4年 (N=42) n(%)	5年以上 (N=86) n(%)	
自身がペアレントメンターになることへの意思がある	89 (50.3%)	31 (59.6%)	21 (52.5%)	37 (43.5%)	n.s.
ペアレントメンターとして活動する際の気がかりがある <内訳>	149 (84.7%)	45 (86.5%)	34 (82.9%)	70 (84.3%)	n.s.
責任が重い	69 (44.8%)	21 (46.7%)	16 (47.1%)	32 (42.7%)	n.s.
相手との関係構築の不安	69 (44.8%)	17 (37.8%)	20 (58.8%)	32 (42.7%)	n.s.
情報・知識不足	108 (70.1%)	34 (75.6%)	27 (79.4%)	47 (62.7%)	n.s.
ノウハウ・経験不足	81 (52.6%)	25 (55.6%)	23 (67.6%)	33 (44.0%)	n.s.
時間的負担	57 (37.0%)	15 (33.3%)	10 (29.4%)	32 (42.7%)	n.s.
精神的負担	51 (33.1%)	15 (33.3%)	8 (23.5%)	28 (37.3%)	n.s.
支援にかかる費用	21 (13.6%)	3 (6.7%)	4 (11.8%)	14 (18.7%)	n.s.
その他	12 (7.8%)	4 (8.9%)	3 (8.8%)	5 (6.7%)	n.s.

(3) ペアレント・メンター養成講座及びペアレント・メンターcaféの開催

ペアレント・メンターの登録

ステップングストーンズ・トリプルPを受講した27名と見学参加した保護者団体の役員6名のうち、ペアレント・メンター基調講演及び個人情報保護と傾聴の講義とロールプレイからなる養成講座を修了した10名がペアレント・メンターに登録した。

ペアレント・メンターの活動をする上で心配事・強み・専門家に望む支援

心配ごととして、メンティからの質問や、障害種別による困りごとの差異、メンティとの距離の取り方などに適切に対応できるか、自分の経験が相手にマッチしているか、研修を受ける時間がとりにくい、子どものプライバシーを護ること等がみられた。

メンターとしてできることは、3歳児健診や保育園・幼稚園など、身近な場所でのメンター相談、トリプルPの技術を相手の育児に沿って「こういう方法もある」と経験談を伝えること、閉じこもりを防ぎ、育児を別の角度からみるきっかけづくりになる等の内容がみられた。また、当事者として感じている強みとして、トリプルPによる子どもの変化をシール帳などで見せ「褒める育児ってこうなんです」と伝えられる、時代の変化のため、体験をそのまま伝えることには限界があるが、「人脈があり、相談先をよく知っている」等がみられた。

必要な支援としては、メンター活動のバックアップ体制づくり、相談の振り返りや事例検討会の開催、コーディネーターの必要性、知識の提供、経費、メンターの情報管理等がみられた。

(4) ペアレント・メンターシンポジウムの開催

ペアレント・メンターの第一人者である鳥取大学の井上雅彦教授の基調講演に加えて、鳴門教育大学の小倉正義准教授、NPO法人ペアレント・メンターかがわの豊田笑子コーディネーター、愛媛県発達障害者支援センターの中村八重保健師によるペアレント・メンターシンポジウムを開催した。参加者は発達障害児を含む障害児の親及び保護者団体、行政、教育、福祉等の職員・専門職など92名のほり、新聞でも大きく紹介された。

シンポジウムが契機となり、行政、研究機関、保護者団体、専門職からなる発達障害者連絡協議会が翌年度から発足し、ペアレント・メンター制度の構築に向けて準備がなされることになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

増田 裕美、西嶋 真理子、田中 輝和。前向き子育てプログラムに参加した親における子育てについての認知と行動の変化。四国公衆衛生学会雑誌(0286-2964)61 巻 1 号

Page71-79(2016.02) (査読有)

西嶋 真理子、松浦 仁美、星田 ゆかり。発達障害児の親を対象に保健師が行った前向き子育てプログラム(Positive Parenting Program;トリプルP)の評価指標による介入効果の分析。日本地域看護学会誌, 16(2): 53 - 64, 2014. (査読有)

[学会発表](計6件)

西嶋 真理子、齋藤 希望、増田 裕美、柴 珠実、西本 絵美、田中 輝和。発達障害児の親に対するステップング・ストーンズ・トリプルPの介入効果の検証。四国公衆衛生学会雑誌(0286-2964)62 巻 1 号 Page40(2017.2.3)ひめぎんホール、愛媛県松山市

武智 真耶、柴 珠実、松浦 仁美、増田 裕美、齋藤 希望、西本 絵美、西嶋 真理子。発達障害児親の会におけるペアレント・メンタリングに関するニーズの分析。日本公衆衛生学会総会抄録集(1347-8060)75回 Page477(2016.10.27))

グランフロント大阪、大阪府大阪市
西嶋 真理子、松浦 仁美、増田 裕美、柴 珠実、西本 絵美、齋藤 希望。発達障害児親の会に所属する親を対象としたステップング・ストーンズ・トリプルPの介入効果。第19回日本地域看護学会学術集会(2016.8.27)自治医科大学、栃木県下野市

西嶋 真理子、松浦 仁美、齋藤 希望、武市 真耶、柴 珠実。療育機関通所経験のある児の親へのステップング・ストーンズ・トリプルPの介入効果。第74回日本公衆衛生学会総会(2015.11.6)長崎新聞文化ホール、長崎県長崎市

西嶋 真理子。グループ・トリプルPの介入による子育て支援効果の分析。行政機関が主催する子育てセミナー受講者を対象に。第18回日本地域看護学会学術集会。(2015.8.2)パシフィコ横浜、神奈川県横浜市

西嶋 真理子、松浦 仁美、星田 ゆかり、増田 裕美。発達障害児の親に対するグループトリプルPの介入効果の分析。第73回日本公衆衛生学会総会(2014.11.6)宇都宮東武ホテルグランデ、栃木県宇都宮市

[その他]

ホームページ等

愛大医学部子育て研究会：
<https://www.facebook.com/aidaiigakubukoacodate/?fref=ts>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西嶋 真理子 (Nishijima, Mariko)
愛媛大学・大学院医学系研究科・教授
研究者番号：50403803

(2) 研究分担者

齋藤 希望 (Saito, Nozomu)
愛媛大学・大学院医学系研究科・助教
研究者番号：40749800

柴 珠実 (Shiba, Tamami)
愛媛大学・大学院医学系研究科・講師
研究者番号：60382397

(3) 研究協力者

西本 絵美 (Nishimoto, Emi)
武智 真耶 (Takechi, Maya)
増田 裕美 (Masuda, Hiromi)
田中 輝和 (Tanaka, Terukazu)
松浦 仁美 (Matsuura, Hitomi)